

第10回“いい川”・“いい川”づくりワークショップin九州（2017.9.9-10）エクスカージョン
【ワークショップ参加者限定の事前申込制】

Aコース：筑後川 堰巡り

2017年9月8日（金）14：00～17：00 ※時間予定です

主催：NPO 法人筑後川流域連携倶楽部

集合場所・時刻 西鉄「久留米駅」裏 岩田屋前 14：00

コース概要（予定）

西鉄久留米 ⇒ 恵利堰 ⇒ 古毛集落オオクス ⇒ 三連水車 ⇒ 山田堰 ⇒ 大石堰
⇒ 一の瀬焼窯元 ⇒ 西鉄久留米駅（※時間の都合で調整する場合があります）

移動手段 ① 8名程度の場合（最低6名実施、10人乗り）、② 20名（最低10名実施、マイクロバス）

参加費 ひとり5,000円（移動車両利用費、保険代含む） ※参加費は事前振込となります

対象 第10回“いい川”・“いい川”づくりワークショップin九州 参加者（6名～20名程度）

参加申し込み *メールかファクシミリで、下記内容を事務局までお申し込みください。

お名前 ※複数名の場合は全員の氏名	() 名	
ご所属 ※代表者のみ		
連絡先 ※代表者	TEL	E-MAIL
☆宿泊（9/8・9/9）希望	男性（ ）名、女性（ ）名	

☆本エクスカージョンに参加される方は、希望があれば、ハynesホテル久留米（西鉄久留米駅前）を優先的に手配することができます。詳細は申込みの上、下記事務局までご相談ください。

問い合わせ・参加申し込み

いい川・いい川づくり実行委員会 事務局 TEL/03-3408-2466 FAX/03-5772-1608

E-mail:kawanohi-2006@mizukan.or.jp

コース及び視察予定地について

*本コースの視察予定地には、7月の九州北部豪雨で被災した箇所も一部含まれています。事前、当日の状況により、一部コース等を変更する場合がありますので、予めご了承ください。



恵利堰は筑後川を堰きとめて用水路に導入する基幹施設で、さらに水路には途中で水量調節のための床島堰、水量増加用の佐田堰とが付属しており、通常一括して床島堰とよばれています。床島堰は田主丸町（現・久留米市）、大刀洗町に位置し、朝倉市に隣接します。恵利堰もまた石畳構造になっており、左岸側に近代的な魚道が設置されていて、この堰もまた水景美を誇っています。

山田井堰の工事は、寛文 3 年に始まり、翌年に完成されました。その内容は水門を現在の岩石の切貫より下流に設け、樋をかけて、堀川に流し込んだといいます。その後、享保 6 年取水口変更、切貫水門(トンネル)となります。宝暦 10 年取水口、堀川拡張、新堀川(南線)の掘削、さらに古賀百工が堰の大改修を行い、現在の姿となります。この大改修は当時としては困難な工事で巨岩、巨石を組み合わせ、また舟通しや石畳に苦心して造られました。これによって、新堀川通水直後の 370ha の水田が 487ha に広がりました。



昭和 28 年の筑後川の大水害で山田井堰も破壊されたものの、改修がなされ、今日見るような石畳の斜堰の優美な姿は変わりません。

筑後川の水を堀川用水に取水しましたが、一部では土地が高かった為、約 220 年前自動回転式の重連水車が設置されました。日本最古の実働する水車として全国的にも有名な「朝倉の揚水車群」は、平成 2 年に「堀川用水」と共に国の史跡に指定されました。現在、朝倉市には「菱野三連水車 (13.5ha) 」「三島二連水車 (10.5ha) 」「久重二連水車 (11ha) 」があり、農地をうるおす面積は合計 35ha にも及びます。



アフガニスタンで活動しているペシャワール会の中村哲さんたちは、山田堰に使われている「斜め堰」や「蛇籠」などの伝統工法を参考にして、アフガニスタンのマルワリード用水路を完成させました。この用水路の完成によって荒廃した地が緑化され、農業生産が飛躍的に拡大し、難民となった住民 65 万人が帰還してコミュニティが再構築されるなど、大きな成果をあげています。

また、2015 年 3 月に、アフガニスタンのドウラニ農業復興開発大臣、アセイ大臣上級補佐官一行が朝倉現地視察を行ないました。同行した中村氏は、一連の日本水利施設をアフガニスタンへ応用することの提案をしました。



大石堰は、五人の庄屋の発願によって筑後川左岸に江戸期に開削されました。これによって、肥沃な大地が生まれ、久留米有馬藩領の水田石高は増大しました。現在もその恩恵を受け、うきはの農産業を支えています。大石水道のほとりには、五庄屋の偉業を称えた三堰の碑 (さんえんのひ) があり、「筑後川は諸志に著はれ実に天下の大水なり」と碑の冒頭に記されています。

筑後地区の西方に、うきは市浮羽町が誇る伝統工芸「一の瀬焼」があります。今から 400 年前、豊臣秀吉が朝鮮に出兵した際、連れ帰った陶工たちによって開かれたのが始まりと言われています。近世は久留米藩の御用窯となっていました。明治維新の際しばらく廃窯となり、昭和 34 年に再興し、現在 6 軒の窯元があります。花瓶・茶器など実用的なものを中心に、その素朴な中にも作り手の情熱が光る作風が人気を呼んでいます。